

高校生における強迫性格と精神的健康

関山 徹〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

Obsessive-Compulsive Personality in High School Students and Mental Health

SEKIYAMA Toru

キーワード：強迫性格尺度、尺度作成、心理的ストレス、コーピング、完全主義

1. 問題

強迫性格と精神的健康との関連については、これまでさまざまな指摘や議論がなされてきた。古典的には強迫神経症は強迫性格の土台の上に生じやすいという見解があり^{*1}、たとえばFreud(1908)は、強迫神経症患者の多くに、肛門性格と呼ばれる強迫性格に相当する人格特徴を見出した。すなわち、強迫神経症患者においては過度の抑制（几帳面、儉約）と放出（わがまま）が併存しており、それを幼児期におけるトイレトレーニング（肛門括約筋による自己のコントロール）の問題に由来すると、Freudは考えたのである。またそれだけではなく、抑鬱や摂食障害、不登校、アパシー等の、必ずしも強迫現象を伴わない精神的な不健康状態にある人々においても、強迫性格との関連が指摘されている（笠原, 1976; 笠原, 1988; 下坂, 1997）。その一方で、強迫性格的なあり方には、勤勉性や高い自己意識、距離感のある人間関係も含まれ、都市工業化した近代社会を生きる私たちにとっては、暗黙のうちに求められている態様であるとも言える。Salzman(1973)は、強迫性格は今日最もよく見られる性格タイプであって、そのすべての人々が精神医学的な治療を必要とするほど不適応に陥っているわけではないと考えて、強迫性格を健全な領域から病的領域まで連続するものとしてとらえ直した。すなわち、健全人における平均的な強迫的心性から、強迫神経症、抑鬱、恐怖症、いくつかの嗜癖状態へと広がる一連の病像を、強迫スペクトルと名付けたのである。このような包括的な観点の導入は、強迫性格と精神的健康との関連を考える上で、画期的なものであったといえよう。しかしながら、どのような場合において、強迫性格が精神的な不健康

状態と結びつくのかについては、未だ充分には明らかになっていない。そこで、本研究では、強迫性格はどのような条件において精神的な不健康状態と関連しやすいのか、と問いを立てることにした。

強迫性格と精神的健康との関連を検討するにあたって、本研究ではLazarus & Folkman(1984)によるストレスのトランスアクション・モデルを援用することにした。このモデルでは心理的ストレスを、環境からの刺激ないしはそれによって生じる一義的な反応としてとらえるのではなく、個人と環境との相互作用を伴った一連の過程であると定義している。ストレス過程は、当初のモデルにおいては、個人がある環境から受けた刺激（出来事）をストレッサーであると認知的に評価する側面とそれを受けて対処する側面に限られていたが、次第にこれ以外のさまざまな側面も含めて検討されるようになってきた。個人内要因と環境要因を加味した研究の一例として、岡安(1992)は性格特性とストレス状況を含めての大学生のストレス過程を検討している。本研究ではこれに倣って、個人内要因として強迫性格を、環境要因として生活場面別に得た変数をストレス過程に追加することにした。また、精神的な不健康状態をストレス反応が高い状態とみなして、研究を進めることにした。

さて、笠原は、医療場面で出会う強迫性格者を、強引で自己中心的な群と、強引さはなく他者配慮を示す群とに分類しており、そのような区別は臨床的に有用であると述べている。また、成田(1981)は近年の青年期患者の特徴を、古典的強迫性格と区別して弱力型強迫性格と呼んでいる。このような臨床的知見を前にすると、強迫性格と精

神的健康との関連を検討する際には、強迫性格のタイプについても考慮したほうがよさそうである。強迫性格には複数の側面があり、そのどれかが前景に現れたり後景に退いたりすることによって、いくつかのタイプが出現すると考えられないだろうか。さらに、強迫性格と近縁の関係にある完全主義の研究においては、完全主義を多次元的な構造と考えられるようになってきており (Frost et al., 1990; Hewitt & Flett, 1990)、適応的な側面と不適応的な側面に分類できることが明らかになってきた (桜井・大谷, 1997; Rice et al., 1998)。したがって、本研究では、強迫性格をいくつかの低位構造をもつものとして考えることにして、強迫性格の各側面と精神的健康との関連を探ることにしたい。

ところが、強迫についての尺度は数多くあるが、そのほとんどは Maudsley Obsessional Compulsive Inventory (MOCI; Hodgson & Rachman, 1977) や Padua Inventory (Sanavio, 1988) のように主として強迫現象を取り上げたものであり、強迫性格を測定することを目的とした尺度は、意外と少ない。本邦では、村松 (1996) や宗像 (1997) によるものがあるが、いずれも項目数が9つしかない。特に、宗像の尺度では、強情さ・堅さ・こだわり等に関する項目が含まれておらず、強迫性格の特徴を包括的にとらえているとは言い難い。また、村松と宗像の尺度では強迫性格を単次元のものとして仮定しているが、果たしてそうであろうか。本研究では、頑固さや強引さ等わがままに関する側面も含めた上で、複数の次元から強迫性格について探っていききたい。しかしながら、上述の条件を満たす尺度は存在しない。そこで、本研究では、まず強迫性格を多次元的な構造としてとらえることが可能な尺度を作成することから取り掛かることにした。

また、青年期前期は強迫的になりやすい時期でもある (たとえば、松本ら (1985) や平山 (1990)) ため、本研究では調査対象として特に高校生を用いることにした。高校生の日常生活場面に即した形で精神的健康との関連を検討していく。

II. 研究 1

【目的】

強迫性格を多次元的な構造としてとらえることのできる尺度を作成して、その信頼性と妥当性を検討する。

【方法】

1. 調査対象

愛知県内の私立L高校に在籍する2年生の男子生徒440名 (普通科279名、商業科20名、工業科141名) を対象とした。

2. 質問紙

(A) 強迫性格尺度 (原案)

Fruedの肛門性格、Salzmanの強迫パーソナリティー、およびDSM-IV (APA, 1987) の強迫性人格障害の診断基準を参考にして、臨床心理学専攻博士課程の学生2名が項目を作成した。その際、病的な強迫傾向ではなく健常者にも普通にあてはまるような性格特徴を述べた内容にすることに留意した。そして、それを病院や学校での臨床経験を有する臨床心理士2名が検討を行った後、予備調査を実施した。分布に著しい偏りのある項目などを除いた上で因子分析を行ったところ、解釈可能な4因子33項目を得た。回答方法は、「まったくあてはまらない (1点)」～「とてもよくあてはまる (6点)」の6段階評定式である。

(B) 強迫現象尺度

強迫性格尺度と強迫現象との関係を検討するために、MOCIの邦訳版 (吉田ら, 1995) を使用した。MOCIは、強迫観念や強迫行為等の強迫現象についての30項目から構成されている。原法での回答方法は強迫現象の有無を問う「はい」か「いいえ」であるが、本研究では、対象が健常者であるため強迫現象の程度を尋ねる形式に改めた。すなわち、「まったくあてはまらない (1点)」～「とてもよくあてはまる (4点)」の4段階評定式への変更である。可能な得点範囲は30～120点であり、強迫現象が多いほど高得点になる。

(C) 支配尺度

強迫性格尺度と支配性との関係を検討するために、EPPS (肥田野ら, 1970) から支配的な特性につ

いての9項目を抜粋して使用した。本研究では回答方法を、「まったくあてはまらない（1点）」～「とてもよくあてはまる（6点）」の6段階評定式に変更した。可能な得点範囲は9～54点であり、支配的であるほど高得点になる。

(D) 内罰尺度

強迫性格尺度と真面目さや自責傾向との関係を検討するために、EPPSから内罰的な特性についての9項目を抜粋して使用した。本研究では回答方法を、「まったくあてはまらない（1点）」～「とてもよくあてはまる（6点）」の6段階評定式に変更した。可能な得点範囲は9～54点であり、内罰的であるほど高得点になる。

(E) 完全主義尺度

強迫性格尺度と完全主義との関係を検討するために、桜井・大谷の自己志向的完全主義尺度 (Multidimensional Self-Oriented Perfectionism Scale : MSPS) を使用した。MSPSには4つの下位尺度 (各5項目) があり、完全でありたいという欲求 (DP) 尺度、自分に高い目標を課する傾向 (PS) 尺度、ミスを過度に気にする傾向 (CM) 尺度、自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向 (D) 尺度から構成される。回答方法は「まったくあてはまらない（1点）」～「とてもよくあてはまる（6点）」の6段階評定式であり、各下位尺度の可能な得点範囲は5～30点である。尚、各下位尺度は完全主義的であるほど高得点になる。

(F) オープナー尺度

強迫性格尺度と頑固さ・強引さ等との関係を検討するために、オープナー尺度 (小口, 1989) を使用した。大辞林 (松村, 1995) によれば、頑固とは「他人の意見を聞こうとせず、かたくなに自分の考えや態度などを守ること」である。オープナー尺度は、「私は他人の言うことを素直に受け入れる」や「聞き上手だと言われる」等の自己開示の受けやすさに関する10項目から構成されており、頑固さ・強引さ等とほぼ逆の性格特性を測定していると考えられる。回答方法は「まったくあてはまらない（1点）」～「とてもよくあてはまる（5点）」の5段階評定式である。可能な得点範囲は10～50点であり、自己開示を受けやすいほど高得点になる。

3. 手続き

2001年3月に、強迫性格尺度原案を無記名式で集団施行した。そのうちの172名には、上述した他の5つの尺度も同時に施行した。

【結果と考察】

1. 因子の抽出

強迫性格尺度 (原案) の33項目について因子分析 (主因子法・バリマックス回転) を行ったところ、解釈可能な4因子を得た。さらに、.350以上の因子負荷量を示し且つ他の因子と重複しない項目を、各因子について負荷量の高い方から5つずつ選出した。次いで改めて因子分析を行ったところ、2項目のみ条件をわずかに満たさない項目があったものの、予想通りの4因子20項目 (累積寄与率47.1%) を得て、第1因子を「完全追求」、第2因子を「わがまま」、第3因子を「良心性」、第4因子を「優柔不断」と名付けた (詳細な結果をTable 1に示した)。

各因子間の相関係数は、.10～.39の間であった。「わがまま」は、他の3つの因子との相関が低めであり、それらとはやや異なる特徴をもっているといえよう。

以上から、各因子は強迫性格の重要な側面を代表していると判断し、強迫性格尺度の下位尺度とすることにした。

2. 信頼性の検討

信頼性の検討のためにCronbachの α 係数を算出したところ、全体で.78、各因子で.61～.76を示した。各因子における値は必ずしも高くはないが、項目数の少なさも考え合わせると相応の内的一貫性を備えていると判断した。

3. 妥当性の検討

妥当性検討のために、強迫性格尺度と他の4尺度との間の相関係数 (r) を算出した (詳細な結果は、Table 2に示した)。強迫現象尺度との相関は、尺度全体および「優柔不断」との間で弱い正の相関を示した。支配尺度との相関は、尺度全体で中程度の正の相関を、下位尺度の全てで弱い正の相関を示した。内罰尺度とは、尺度全体および

Table 1 強迫性格尺度の項目内容と因子構造 (n=440)

項目内容	F1	F2	F3	F4	全体
	完全追求	わがまま	良心性	優柔不断	
納得できる完成度になるまで、私は努力する。	.707				
何事も完璧にやらないと気がすまない。	.686			.326	
やるべきことは徹底的にやりたい。	.660				
手がけた仕事は、最後まで自分でやり通さなければ納得できない。	.653				
よい結果を残すために楽しみを我慢するのは当然だと思う。	.362				
私は意地っ張りだ。		.743			
頑固だ、とよく人から言われる。		.597			
自分勝手だ、とよく人から言われる。		.550			
他の人の仕事について、つい文句や批判を言ってしまったら。		.415			
私はケチだ。		.402			
誰も見ていなくても、私はルールを守る。			.578		
まじめだ、とよく人から言われる。			.538		
他者の不正な行為は許せない。			.409		
私は罪悪感をもちやすい。			.382		
うそをつくことはとても悪いことだと思う。			.375		
私は判断するのに長い間迷う。				.568	
計画どおりにいかないと、困ってしまう。				.493	
完成度を高めようとして、しめきりに遅れそうになることがある。				.412	
私は、小さなことでも時間をかけて考える。				.386	
ふだんは使わない物でも、捨てられない。				.344	
寄与率(%)	21.1	11.3	8.5	6.2	47.1
α係数	.76	.67	.64	.61	.78
因子間相関 (r): F1	1.00	—	—	—	
F2	.18	1.00	—	—	
F3	.39	.10	1.00	—	
F4	.26	.16	.34	1.00	

(因子負荷量は、|.300| 以上を記載した)

Table 2 各尺度の平均値(SD)および強迫性格尺度と妥当性検討用尺度との相関係数 (n=172)

尺度	平均値 (SD)	全体	完全追求	わがまま	良心性	優柔不断
強迫現象	65.59 (10.09)	.27	.11	.11	.19	.33
支配	26.06 (7.60)	.48	.33	.28	.32	.34
内罰	33.19 (6.71)	.40	.32	-.01	.42	.32
完全主義						
・DP	18.20 (5.06)	.65	.74	.10	.39	.48
・PS	20.12 (4.99)	.60	.62	.13	.46	.37
・CM	15.19 (4.42)	.36	.28	.14	.27	.27
・D	19.79 (4.64)	.61	.40	.19	.39	.64
オープナー	32.54 (6.08)	.14	.26	-.23	.22	.10

「良心性」で中程度の正の相関を、「完全追求」および「優柔不断」で弱い正の相関を示した。完全主義尺度のDPとは、尺度全体および「完全追求」で強い正の相関を、「優柔不断」で中程度の正の相関を、「良心性」で弱い正の相関を示した。PSとは、尺度全体および「完全追求」で強い正の相関を、「良心性」で中程度の正の相関を、「優柔不断」で弱い正の相関を示した。CMとは、尺度全体および「わがまま」を除く下位尺度で弱い正の相関を示した。Dとは、尺度全体および「優柔不断」で強い正の相関を、「完全追求」で中程度の正の相関を、「良心性」で弱い正の相関を示した。オープナー尺度とは、「わがまま」で負の弱い相関を、「完全追求」と「良心性」で弱い正の相関を示した。

性」で弱い正の相関を示した。

以上の相関のパターンは、ほぼ納得のできるものといえよう。とりわけ、強迫現象尺度および完全主義尺度との相関のパターンは、強迫性格尺度の独自性を示す上で好ましい結果であった。まず、強迫現象と強迫性格との対比の観点から述べていく。強迫現象は病者を中心にして現れるが、強迫性格は病者と健常者を含む広い範囲で認められるものと仮定される。本研究の結果からは、強迫性格尺度は強迫現象尺度とある程度の関連を保持しつつも、完全主義尺度や支配尺度、内罰尺度などの性格特性に類する尺度ほどには関連が強くないことを読みとることが可能であり、先述の仮定を支持しているといえよう。次に、完全主義尺

度と強迫性格尺度との対比の観点から述べると、強迫性格尺度は完全主義の概念に含まれない「わがまま」の側面まで捉えており、強迫性格を多面的に測定できていると考えられる。

したがって、強迫性格尺度は実用に耐えうる一応の妥当性を備えていると判断した。しかしながら、被検者が男子高校生だけであったため、今後は性別、年齢、病理性などを加味したデータを収集して、より精密に妥当性を検討していく必要がある。

Ⅲ. 研究 2

【目的】

強迫性格を4つの側面から測定し、その各側面と精神的健康との関連を高校生の生活場面に即して検討する。

【方法】

1. 調査対象

先述した私立L高校2年生の男子生徒268名（普通科172名、商業科20名、工業科76名）を対象とした。

2. 質問紙

(A) 強迫性格尺度

研究1で得た20項目を使用した。各下位尺度の可能な得点範囲は5～30点であり、それぞれの強迫性格傾向が強いほど高得点となる。

(B) ストレッサー認知尺度

場面別にストレスの認知的評価面を測定するために、大迫(1994)の尺度を使用した。その内容は、高校生の日常における5つの生活場面について、最近どのくらいやる気になったり負担に感じたりしたかを「とても楽しい(1点)～「とてもつらい(7点)」の7段階評定式で尋ねるものである。なお、5つの場面とは、①学業(勉強や成績)のこと、②友人や恋人との関係、③教師や学校との関係、④自分の性格や体のこと、⑤家庭のこと、である。また、ストレッサー認知が否定的であるほど高得点となる。

(C) ストレス・コーピング尺度

場面別に対処方略を調べるために、ストレッサー認知尺度で述べた5つの場面ごとに、ラザルス式ストレスコーピングインベントリー(日本健康心理学研究所, 1996)を用いて尋ねた。但し、被検者の負担軽減のため、原法の64項目全てを使用することはせず、対処方略の型ごとに2項目を抜粋して、下位尺度とした。なお、対処型は、計画型(Pla)、対決型(Con)、社会的支援模索型(See)、責任受容型(Acc)、自己コントロール型(Sel)、逃避型(Esc)、離隔型(Dis)、肯定評価型(Pos)の8つである^{*2}。また、教示は、原法では「ここ2、3ヶ月間」について尋ねているのに対して、本研究では3ヶ月間とした。回答方法は、「まったくあてはまらない(1点)～「とてもよくあてはまる(4点)」の4段階評定式で尋ねた。したがって、各下位尺度の可能な得点範囲は2～8点であり、ある対処方略を多く用いるほど当該の下位尺度が高得点となる。

(D) ストレス反応尺度

精神的な不健康状態の指標としてストレス反応を測定することにした。そのための尺度として、対象は高校生であるが特に問題はないと判断して、中学生用ストレス反応尺度(岡安ら, 1992)を用いた。但し、被検者の負担軽減のため、「不機嫌・怒り感情」、「身体的反応」、「抑うつ・不安感情」および「無力的認知・思考」の4因子からそれぞれ4項目を抜粋して16項目とした^{*3}。回答方法は、「まったくあてはまらない(1点)～「とてもよくあてはまる(4点)」の4段階評定である。可能な得点範囲は16～64点であり、ストレス反応が多いほど高得点となる。

3. 手続き

2001年3月に、上述の4つの質問紙を無記名式で集団施行した。

【結果と考察】

1. 各尺度の平均点および強迫性格尺度との関係

4つの尺度の平均値(SD)および強迫性格尺度との相関係数をTable 3に示した。

中程度以上の相関を示した箇所注目すると、ストレス反応と「わがまま」との間で正の相関が

Table 3 各尺度の平均値(SD)および強迫性格尺度との相関係数($r=268$)

尺度		平均値 (SD)	強迫性格尺度との相関(r)				
			完全追求	わがまま	良心性	優柔不断	
強迫性格	完全追求	20.31 (4.30)	1.00	—	—	—	
	わがまま	16.28 (4.57)	.07	1.00	—	—	
	良心性	18.87 (4.28)	.40	.06	1.00	—	
	優柔不断	19.49 (4.57)	.37	.23	.41	1.00	
ストレス認知	学業	4.79 (1.39)	-.16	.03	-.12	-.08	
	友人・恋人	2.98 (1.50)	-.02	.03	.01	.06	
	学校・教師	4.05 (1.33)	-.15	.01	-.20	-.14	
	自分の性格・体	4.00 (1.31)	-.02	.21	.13	.13	
ストレス・コーピング	学業	Pla	4.81 (1.36)	.31	-.02	.10	.13
		Con	4.78 (1.30)	.13	.19	.12	.25
		See	4.19 (1.38)	-.04	.10	.05	.14
		Acc	5.32 (1.35)	.28	-.04	.15	.13
		Sel	4.72 (1.40)	.12	-.01	.12	.12
		Esc	5.56 (1.44)	-.16	.19	.01	.07
		Dis	4.86 (1.26)	-.03	.18	.07	.05
		Pos	4.97 (1.39)	.23	-.04	.21	.14
	友人・恋人	Pla	4.50 (1.41)	.02	.00	.12	.03
		Con	4.61 (1.49)	.05	.09	.02	.17
		See	4.43 (1.63)	.00	.06	.09	.10
		Acc	4.99 (1.48)	.09	.02	.14	.10
		Sel	5.05 (1.41)	.02	.05	.08	.09
		Esc	4.52 (1.40)	-.11	.17	.06	.06
		Dis	4.66 (1.54)	-.13	.10	-.13	.00
		Pos	5.88 (1.37)	.19	.00	.11	.14
	学校・教師	Pla	4.24 (1.38)	.22	-.03	.19	.18
		Con	4.42 (1.37)	.11	.13	.13	.20
		See	4.14 (1.41)	.11	.14	.11	.18
		Acc	4.69 (1.51)	.20	-.03	.17	.14
		Sel	4.80 (1.38)	.13	.01	.15	.13
		Esc	4.97 (1.49)	-.19	.21	-.06	.03
		Dis	4.82 (1.44)	-.10	.12	-.08	.01
		Pos	5.02 (1.61)	.24	.02	.20	.15
	自分の性格・体	Pla	4.62 (1.51)	.07	.01	.06	.08
		Con	4.58 (1.34)	.03	.08	.09	.16
		See	3.90 (1.49)	.04	.13	.19	.23
		Acc	4.99 (1.53)	.19	-.08	.20	.16
Sel		4.77 (1.42)	.06	-.04	.07	.08	
Esc		4.61 (1.43)	-.18	.14	.03	.16	
Dis		4.67 (1.52)	-.03	.04	.06	.14	
Pos		5.50 (1.47)	.18	.03	.16	.18	
家庭	Pla	4.22 (1.45)	.04	.08	.12	.13	
	Con	4.34 (1.50)	.08	.18	.15	.26	
	See	3.87 (1.44)	.10	.14	.18	.25	
	Acc	4.43 (1.48)	.03	.03	.13	.15	
	Sel	4.55 (1.44)	.03	.13	.13	.15	
	Esc	4.72 (1.58)	-.11	.24	.02	.13	
	Dis	4.71 (1.55)	-.11	.15	.06	.12	
	Pos	5.48 (1.45)	.13	.07	.16	.22	
ストレス反応		36.44 (9.49)	-.03	.43	.07	.29	

認められた。ストレス反応と強迫性格の各側面との関連は一様ではなく、特に「わがまま」において結びつきが強く表れていたといえよう。

Table 4 ストレス認知、ストレス・コーピングおよび強迫性格によるストレス反応の予測
(階層的重回帰分析)

尺度		標準偏回帰係数(β)			
		I	II	III	
ストレス認知	学業	.18 **	.10	.14 *	
	友人・恋人	.02 †	.10	.07	
	学校・教師	.13 *	.10	.22 **	
	自分の性格・体	.21 **	.17 **	.04	
	家庭	.22 **	.08	.11 †	
ストレス・コーピング	学業	Pla	-.04	-.07	
		Con	.05	-.02	
		See	.02	.01	
		Acc	.05	.06	
		Sel	.10	.10	
		Esc	.08	.06	
		Dis	.08	.01	
		Pos	-.03	-.01	
		友人・恋人	Pla	-.10	-.02
			Con	.01	-.01
	See		.09	.10	
	Acc		.07	.02	
	Sel		.11 †	.10 †	
	Esc		-.03	-.05	
	Dis		-.01	-.03	
	Pos		-.08	-.08	
	学校・教師		Pla	.10	.09
			Con	.02	.00
		See	.08	.07	
		Acc	-.10	-.07	
		Sel	-.14 *	-.14 *	
		Esc	.07	.01	
		Dis	.02	.08	
		Pos	.02	.03	
		自分の性格・体	Pla	.10	.13 †
			Con	.07	.11
	See		-.01	-.03	
	Acc		-.19 *	-.13 †	
	Sel		-.03	.00	
	Esc		.08	.07	
Dis	-.16 †		-.06		
Pos	.03		-.02		
家庭	Pla		.10	.07	
	Con		.01	-.08	
	See	.05	.01		
	Acc	-.09	-.06		
	Sel	.02	-.02		
	Esc	.14	.11		
	Dis	.00	-.03		
	Pos	-.03	-.10		
	強迫性格	完全追求		-.03	
		わがまま		.28 **	
良心性			.06		
優柔不断			.26 **		
重相関係数(R)		.52	.66	.75	
自由度調整済み重決定係数		.25	.32	.46	

(†: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .01$)

2. ストレッサー認知、ストレス・コーピングおよび強迫性格によるストレス反応の予測

強迫性格尺度とその各側面がストレス反応の分散にどの程度寄与しているかを把握するために、ストレッサー認知尺度、ストレス・コーピング尺度および強迫性格尺度を説明変数、ストレス反応尺度を基準変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果を、Table 4に示した。Iは独立変数がストレッサー認知のみの場合、IIはIにストレス・コーピングを加えた場合、IIIはIIに強迫性格を加えた場合である。重相関係数の値は、Iでは.52 ($F(5, 262)=19.21, p<.001$)、IIでは.66 ($F(45, 222)=3.82, p<.001$)、IIIでは.75 ($F(49, 218)=5.61, p<.001$)を示した。自由度調整済み重決定係数は、Iでは.25、IIでは.32、IIIでは.46になった。すなわち、ストレス反応の分散を、ストレッサー認知だけでは25%、ストレッサー認知とストレス・コーピングでは32%、さらに強迫性格までを含めると46%まで説明していることになる。したがって、強迫性格はストレス反応を予測する上で重要な要因であるといえよう。

次に、特にIIIにおける標準偏回帰係数の検定結果に注目すると、ストレス反応との間で正の相関を示したものは、「学業のこと」でのストレッサー認知 ($\beta=.14, p<.05$) および「学校や教師

との関係」でのストレッサー認知 ($\beta=.22, p<.01$)、強迫性格の「わがまま」 ($\beta=.28, p<.01$) および「優柔不断」 ($\beta=.26, p<.01$) であった。すなわち、「学業のこと」や「学校や教師との関係」でストレスを強く認知しているほど、あるいは強迫性格の「わがまま」や「優柔不断」の側面が強いほど、ストレス反応が多く生じていた。また、ストレス反応との間で負の相関を示したものは、「学校や教師との関係」でのストレス・コーピングにおける自己コントロール型 ($\beta=-.14, p<.05$) であった。言い換えれば、「学校や教師との関係」で自制的な対処行動をとることが少ないほど、ストレス反応が多く生じていた。以上からは、高校生にとって学業それ自体と学業を支える人および場は、精神的健康を大きく左右する要因であることが確認されたといえよう。また、学校という集団社会や教師という目上の存在との関係においては、自分をコントロールした上での協調的な振る舞いが重要であり、そのような対人交流スキルが備わっていない場合にストレス反応が生じやすいと考えられるだろう。そして、強迫性格の全ての側面がストレス反応に影響を及ぼしているのではなく、「わがまま」と「優柔不断」の側面に限定されていることが明らかになった点は意義深い。

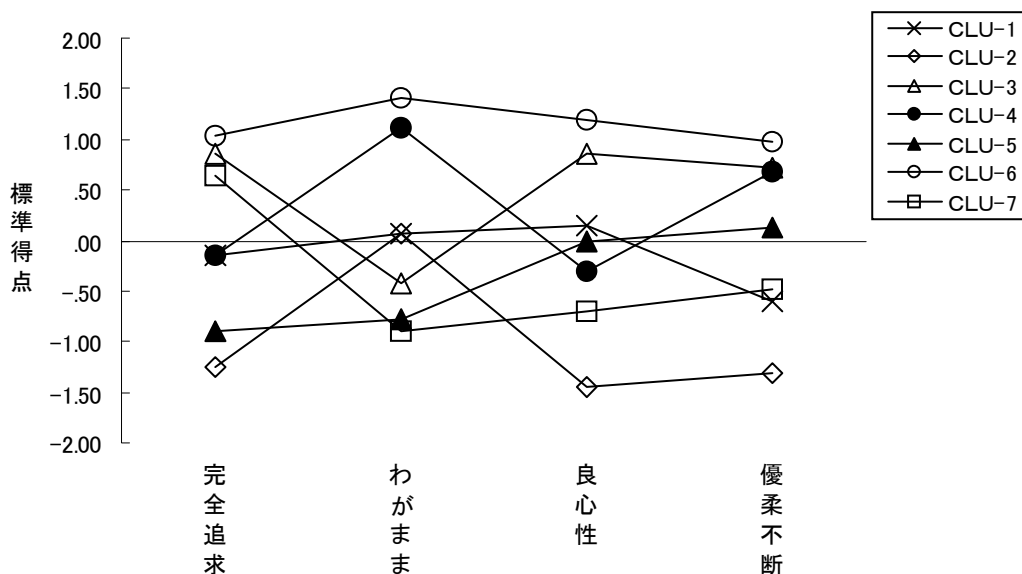


Figure. 1 強迫性格尺度のクラスター・パターン

Table 5 強迫性格クラスターを要因とした分散分析

	CLU-1	CLU-2	CLU-3	CLU-4	CLU-5	CLU-6	CLU-7 ^[1]	F値 ^[2]	下位検定 ^[3]
	n=51	n=33	n=49	n=34	n=41	n=27	n=33		
ストレス反応尺度	36.10 (7.95)	35.52 (9.89)	34.63 (7.88)	41.85 (8.68)	34.00 (9.12)	44.44 (9.92)	31.52 (8.73)	8.589***	CLU-1,CLU-2,CLU-3,CLU-5,CLU-7 < CLU-6 *** CLU-5,CLU-7 < CLU-4 ***, CLU-3 < CLU-4 ** CLU-1, CLU-2 < CLU-4 †

[1] 上段:平均値, 下段:SD, [2] $df=(6,261)$, [3] Tukey's HSD test (†: $p<.10$, **: $p<.01$, ***: $p<.005$)

3. 強迫性格のクラスター・パターンとストレス反応との関連

強迫性格の4つの側面は、実際には個人内において混合した状態で存在すると予想される。そこで、4つの側面の組み合わせの仕方によって、ストレス反応との関連に違いが認められるどうかを調べることにした。具体的には、強迫性格のクラスター・パターンを要因、ストレス反応を従属変数とした分散分析を行うことにより検討した。まずそのための準備として、強迫性格尺度の4つの下位尺度を変量としてクラスター分析(k-mean法)をしたところ、Fig. 1に示した7つのクラスターに分類できた。そして、この7つのクラスターを要因としてストレス反応を従属変数とした分散分析を行ったところ、クラスターの効果が有意であった ($F(6, 261)=8.59, p<.005$; 詳細はFigure 1とTable 5を参照)。下位検定の結果、CLU-4とCLU-6は残りのクラスターと比較して、平均値が有意に高いないしは有意に高い傾向にあった。すなわち、「わがまま」と「優柔不断」が共に高いという特徴を示したクラスターおよび全ての側面で強迫性格の特徴を示したクラスターは、他のクラスターよりもストレス反応が多かった。また、興味深い結果として、CLU-3は、「わがまま」の低さを除けばCLU-6と似たパターンであるにもかかわらず、CLU-4とCLU-6とは異なる結果を示した。

以上からは、強迫性格は全ての側面が一様にストレス反応と関係しているのではなく、「わがまま」と「優柔不断」の側面が共に高い条件で、ストレス反応と関連が生じやすいことが明らかになったといえよう。

IV. 総合的考察

従来の研究では、強迫性格とさまざまな心理的不適応との関連が論議されてきた。本研究では、強迫性格と精神的健康との関連は必ずしも一様なものではないという視点から、強迫性格を多次元的な構造として仮定すると共に、ストレス過程の文脈から強迫性格と精神的な不健康状態との関連を検討してきた。また、併せて、強迫的になりやすいとされている青年期前期の高校生における、日常生活に即した場面を考慮して検討を行った。

そのために、まず強迫性格を多次元的な構造として把握することが可能な尺度を作成することにした。その結果、「完全追求」、「わがまま」、「良心性」、「優柔不断」の4つの側面からなる尺度を得ることができた。伊藤(2004)の指摘によれば、完全主義の研究は尺度の開発により構成概念としての洗練化がなされ、さらに多次元尺度の導入により研究が展開したとのことである。このように強迫性格と近縁の関係にある完全主義研究における動向を視野に入れると、本研究における尺度の作成は強迫性格研究の発展にいくらかは寄与できたかもしれない。

さらに、強迫性格と精神的健康との関連の検討では、第一にストレス反応を予測する上で強迫性格を含めた方がより説明率が上昇することが明らかになった。第二に、ストレス反応との関連は強迫性格の各側面で一様なものではなく、特に「わがまま」と「優柔不断」において結びつきがあることが明らかになった。第三に、強迫性格の各側面が個人内でどのようなパターンにある際にストレス反応が高いかを検討したところ、すべての側面が多い場合および「わがまま」と「優柔不断」

の側面が多い場合であることがわかった。したがって、強迫性格の中でも、「わがまま」と「優柔不断」の側面は不健康な状態と関連しやすく、「完全追求」と「良心性」の側面は健康な状態と関連しやすいと考えられよう。しかしながら、「完全追求」と「良心性」が、「わがまま」と「優柔不断」の双方を伴っていると不適応的に作用する点には留意しなくてはならない。

また、高校生の日常生活における精神的健康の観点からは、上述したように性格の側面や、学校という集団社会や教師との関わりにおける自己コントロールのスキルが、ストレス反応に関連していることがわかった。男子高校生のみから得た結果ではあるが、これらの知見は、今後、予防策としての高校生のストレス・マネジメント教育に活かせるはずである。自分自身の性格とのつきあい方や集団・年長者との対人関係の取り方について、高校生が効果的に学ぶことができる教育プログラムの開発が待たれる。

※本研究は、日本心理学会第65回大会 (2001年11月7日・筑波大学) において発表した内容 (「高校生における強迫性格—強迫性格尺度作成、およびストレス反応との関係の検討—) を、大幅に加筆修正したものである。

【註】

- 1) しかしながら、西岡・笠原(1995)のレビューによれば、強迫性格と強迫性障害の関連が必ずしも強固なものではないことが、近年、明らかにされつつある。
- 2) 項目の内訳は次の通り。計画型 (Pla) として「解決のために、計画をたてて実行した」と「うまくいくようにやり方を変えてみた」、対決型 (Con) として「いろいろなやり方でぶつかっていった」と「自分の気持ちを無理に紛らわそうとした」、社会的支援模索型 (See) として「具体的に何か援助を受けられる人を探した」と「自分の気持ちを友人、友人に理解、同情してもらった」、責任受容型 (Acc) として「人のせいにはしない

で、自分自身のやり方を反省した」と「今までの行動を反省し、新しいやり方を考えた」、自己コントロール型 (Sel) として「自分の嫌な気持ちを外に表さないようにした」と「自分をぎりぎりまで追いつめないで、余裕を残しておいた」、逃避型 (Esc) として「その状況が早く終わるように願った」と「問題が難しくなったので放り出してしまった」、離隔型 (Dis) としていろいろやったので、あとはなるようにしかならないと思った」と「その問題を忘れるようにつとめた」、肯定評価型 (Pos) として「困難に直面して、かえって強い人間に変化、成長したと思う」と「人生での大切なことだと思った」である。

- 3) 項目の内訳は次の通り。因子順に、3・4・11・19、47・48・52・62、1・5・6・9、21・26・29・44 (数字は原法の項目番号を示す)。

【文献】

- American Psychiatric Association (1987) *DSM-IV: Diagnostic and statistical manual of mental disorder, 4th ed.* Washington DC: APA, American Psychiatric Press.
- Freud, S. (1908) *Charakter und Analerotik*. [懸田克躬・吉村博次(訳)(1969) 性格と肛門愛. フロイト著作集第5巻, 人文書院.]
- Frost, R.O. Marten, P. Lahart, C. & Rosenblate, R. (1990) The dimensions of perfectionism. *Cognitive therapy and research*, 14(5), 449-468.
- Hewitt, P.L. & Flett, G.L. (1990) Dimensions of perfectionism and depression: A multidimensional analysis. *Journal of social behavior and personality*, 5, 423-438.
- 肥田野直・岩原信九郎・岩脇三良・杉村健・福原真知子 (1970) E P P S 性格検査手引. 日本文化科学社.
- 平山正実 (1990) 青年期における神経症的病態の特徴: 強迫神経症. *臨床精神医学*, 19(6), 773-779.

- Hodgson,R.J. & Rachman,S. (1977) Obsessional compulsive complaints. *Behaviour research and therapy*, 15, 389-395.
- 伊藤菜穂子(2004) 不適切な動機による完全主義が心理的不適応に及ぼす影響. 心理臨床学研究, 22(5), 542-551.
- 笠原嘉 (1976) うつ病の病前性格について. 笠原嘉(編), 躁うつ病の精神病理 I, 1-29, 弘文堂.
- 笠原嘉 (1988) 退却神経症. 講談社学術新書.
- Lazarus,R.S. & Folkman,S. (1984) *Stress, appraisal, and coping*. [本明寛・春木豊・織田正美(監訳) (1991) ストレスの心理学. 実務教育出版]
- 松本雅彦・石坂好樹・田村芳記・南陽子 (1985) 青年期強迫神経症の臨床. 精神医学, 27(10), 1113-1122.
- 松村明(編) (1995) 大辞林第二版, 三省堂.
- 宗像剛 (1997) 大学生のアパシー傾向の男女別検討. 心理学研究, 67(6), 458-463.
- 村松公美子 (1996) アレキシサイミアと強迫性格計量精神医学的研究. 精神医学, 38(10), 1055-1063.
- 成田善弘 (1981) 強迫神経症とその周辺. 清水将(編), 青年期の精神科臨床, 64-82, 金剛出版.
- 日本健康心理学研究所 (1996) ストレス コーピング インベントリー 自我態度スケール マニュアル——実施法と評価法. 実務教育出版.
- 西岡和郎・笠原嘉 (1995) 強迫性障害と関連する人格. 季刊精神科診断学, 6(4), 435-445.
- 小口孝司 (1989) 自己開示の受け手に関する研究—オープナー・スケール, R-JS-DQとSMIを用いて—. 立教大学社会学部研究紀要応用社会学研究, 31, 49-64.
- 岡安孝弘 (1992) 大学生のストレスに影響を及ぼす性格特性とストレス状況との相互作用. 健康心理学研究, 5(2), 12-23.
- 岡安孝弘・島田洋徳・坂野雄二 (1992) 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み. 早稲田大学人間科学研究, 5(1), 23-29.
- 大迫秀樹 (1994) 高校生のストレス対処行動の状況による多様性とその有効性. 健康心理学研究, 7(1), 26-34.
- Rice, K.G. Ashby, J.S. & Slaney R.B. (1998) Self-esteem as a mediator between perfectionism and depression: A structural equations analysis. *Journal of counseling psychology*, 45(3), 304-314.
- 桜井茂男・大谷佳子 (1997) “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係. 心理学研究, 68(3), 179-186.
- Salzman, L. (1973) *The obsessive personality*. [成田善弘・笠原嘉(訳) (1985) 強迫パーソナリティ. みすず書房.]
- Sanavio,E. (1988) Obsessions and compulsions: the Padua inventory. *Behaviour research and therapy*, 26, 169-177.
- 下坂幸三 (1997) 摂食障害と強迫. 牛島定信(編), 強迫の精神病理と治療, 118-137, 金剛出版.
- 吉田充孝・切池信夫・永田利彦・松永寿人・山上榮 (1995) 強迫性障害に対するMaudsley Obsessional Compulsive Inventory (MOCI)邦訳版の有用性について. 精神医学, 37(3), 291-296.